図書だより

第５８号
平成２８年２月５日
呉工業高等専門学校
図　書　館
http://wwwlib.kure-nct.ac.jp

暗車は並ぶ（撮影：建築学科１年　荒谷　太一）場所：大和ミュージアム

目　　次

・巻頭文　「本棚を持ち歩く」 ……図書館長　笠井　聖二　2
・ 平成２７年度校内読書感想文コンクールの表彰式 ……3
・ 第１２回校内読書感想文コンクール
最優秀賞
「スクラップ・アンド・ビルド」を読んで　―思いを繋ぐには―　Ｃ１　沖田　航周　4
「星の王子さま」を読んで　―大人と子ども―　Ａ２　清水　波音　5
「科学者は戦争で何をしたか」を読んで　Ｍ３　空　翔太　6
優秀賞
１年生の部　Ｍ　上本　拓実　Ｍ　佐藤　尊　Ｅ　大町　尚秀　Ｅ　堀越　悠斗　Ａ　高田　朋洋 ……7
２年生の部　Ｍ　榊　奈々子　Ｅ　土岩　大悟　Ｃ　小村　創史　Ｃ　松岡　野乃華　Ａ　今田　桃世 ……１２
３年生の部　Ｍ　堀　龍司　Ｃ　浅野　快慧　Ｅ　角中　大志　Ａ　白数　夏生 ……１７
・ 講評……２１
・ 行事報告　平成２７年度ブックハンティング ……学生会　文化環境委員長　渡邊　優樹　文化環境副委員長　三京　拓弥　２３
ブックハンティング図書紹介
・ お知らせ　貸出回数上位ベスト１０，DVD 利用回数ランキング……図書館　２８
・ 編集後記

巻頭文

本棚を持ち歩く

図書館長　笠 井　聖 二

タイトルを見て、察しのよい皆さんは、何の話か分かったと思います。電子書籍について書きたいと思います。

昨年、私がAmazonで購入した本の約半分が電子書籍でした。多くは小説ですが、これまであまり電子書籍で購入することのなかった技術関係の解説書なども含まれています。解説書は、小説のように順番に読むというだけではなく、本のあちらこちらを読み歩くという利用も多いので、パラパラとページをめくったり、当たりをつけて開いたりすることがし易い大きさを実感できる本の形態で購入することが殆どでした。解説書も電子書籍で購入するようになったのは、直ぐに購入し読むことができるというのも理由のひとつですが、持ち歩くのが簡単ということが大きな理由です。解説書は、家と学校の間で持ち歩くことも多く、複数の解説書を持ち歩くのも大変なので電子書籍もいいかなと思い買ってみました。そうすると、違った効果もありました。

ご存知のように、電子書籍のアプリでは、購入した電子書籍以外のデジタルファイルも登録できます。最近は、学術論文もデジタルファイル化されているので、電子書籍用アプリに登録しておくと、部屋の本棚のように、論文や資料などもファイリングできます。落ち着いて本や論文を読む時間を取ることができない場合も多く、購入した本や紙に印刷しファイリングした論文も、結局、読まないままおいておき、忘れてしまうということもあります。いわゆる「積読」の状態です。積読の状態は強い意志をもたないとなかなか解消されませんが（少なくとも私は)、電子書籍だと、ちょっと空いた時間に、どこにいても本棚の中を見ることができるので、積読の解消に効果があることが分かりました。積読している本や論文を簡単に認識することができるので、積み上げた中の本や論文を忘れてしまわずに読み始めることが増えるためだと思います。更に、私はなかなか本を捨てられない性分で、整理も苦手で家では乱雑に床に本が積み上げられていますが、電子書籍だとこのようなことも解消できるはずです。

学生の皆さんの生活ではどうでしょうか。学校のロッカーに教科書を入れたままにしている学生も多いのではないかと思います。確かに、教科書・資料などは重いので、毎日の通学に持ち歩くのは大変だと思いますが、これだと自宅で学習するというのは難しいのではないでしょうか。もし、教科書などが電子書籍になれば、軽いタブレットを１つだけもって歩けばよいので、場所を選ばず学習がもう少し進むのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

電子書籍の利用は始まったばかりですので、学校での利用においては制度上や技術的な問題もたくさんありますが、そのメリットも大きいと思います。そろそろ、学校として積極的な利用を考えていく時期にきているのではないかと思います。先生の中には、授業中に電子教科書を見る振りをしてインターネット等で遊ぶ学生がいるのではないかと心配する方もおられます。このようなことで、本校の教育の情報化が進まないのは残念です。学生の諸君と協力しながら、呉高専らしい電子書籍の活用を議論できたらうれしいなと思います。

平成２７年度　校内読書感想文コンクールの表彰式

平成２７年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

１年　環境都市工学科　　沖田　航周
２年　建築学科　　清水　波音
３年　電気情報工学科　　空　翔太

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第１２回になります。学生は、

１年生：芥川賞・直木賞受賞作等の課題図書
２年生：教員の指定した課題図書
３年生：ノンフィクション作品や評論など現代社会に関する本
４年生以上：小説、評論、ノンフィクション、エッセイ等問わない

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教員が行います。

最優秀賞の受賞は、前回と同様、男子学生２名、女子学生１名という結果になりました。今回は、４年生以上の応募はありませんでしたが、次回にはたくさんの応募があることを期待しています。

第１２回　校内読書感想文コンクール最優秀賞

１年生の部

スクラップ・アンド・ビルド

羽田　圭介　著

環境都市工学科　沖田　航周

「スクラップ・アンド・ビルド」を読んで
――思いを繋ぐには――

この物語は死を意識しながら介護を受ける祖父。その祖父の介護を押し付けられ、嫌々行っている母親。仕事を辞め、居候状態でせめてもと祖父の介護に協力するが祖父に対して継続的な優しさを持てない主人公。死から逃避するための医療と介護に翻弄されている祖父に対し、どうしようもできない気持ちを抱きながら日々を悶々と過ごしている一家の話だ。数年後、自分にも関係してくるであろう問題で主人公と自分を重ね合わすことができ、切ない気持ちになった。十数年後はますます現実的な立場となり、自分自身が問題解決のために動かないといけない親世代になることを想像して読むと、複雑な気持ちになった。

立場や考え方で色々な意見が言える今日。歓迎すべき状況なのに意見が多すぎるため、決めるということができない。決定権を持たない人々が口々に意見し紛糾する場面は「何が正解かを誰か教えてくれ」と叫んでいるように思えた。家族とは命を繋いだ結果であり、母屋とそれに増築した家屋のように思えた。母屋が古くなり何らかの対応が必要となった時、現代の象徴である平等のもと、どうするのか、誰がするのか意見が異なり、なかなか答えが出ない状況に陥ってしまう。ましてやその母屋を解体するに値する世代交代は簡単にはいかないようだ。皆、昔からの母屋、親を大事にしたいと思っている。しかしその時の状況で出来ることと出来ないことがあり、それは気持ちの差が出る。本当に難しい問題だ。

優しくされたい祖父と甘やかす事は自立を奪い、老いを加速させてしまうと案ずる母親。だがそればかりとは言い切れずいじわるな気持ちが見え隠れすることを祖父は気づいている。全体的にやさしいが自分自身も不安定なため、日によって態度が変わる主人公。どの気持ちもわかる。時限爆弾を抱えているように思えた。

何か大きな力で抑えつけられてやらされる方が楽なのだろうか。以前は目上の人に逆らうことは出来なかったようだが、今の時代、それぞれの年代が意見を持ち、尊重しないといけない風潮だ。若い僕たちには嬉しいことだが、自分もいつまでも若い世代でいられない。いずれは問題解決を先頭に立って行わないといけない世代になる。その時、諦めの気持ちで過ごさないといけないのだろうか。そんなことを繰り返していては、いつか時限爆弾は爆発してしまうだろう。

世代交代はどういうものなのか考えなければいけないと思った。戦争の話をする場面から、祖父世代は「大変な時代を生きてこられたのですね。お疲れ様、あなたたちのお陰で今の私たちがあります。もっとお礼がしたいけど出来なくてごめんなさい。」と謙虚な気持ちを持ってほしいのではと思った。介護や日々の生活に困窮している場面から、母親世代は「色々なことをさせてごめんなさい、心配事を増やさないようにして自分のことは出来るだけ自分で頑張るから出来ないところはどうか助けてください。」と言ってほしいのだろう。毎日家族がもめていて社会との希薄な世界に生きる主人公世代は新しい時代を作っていくのは期待と不安でいっぱいだ。だから「応援しているよ。失敗を恐れずに自信を持って挑んで行け。」と背中を押して欲しいとお願いしたいのではないかと思った。今すぐではないけど、世代交代の場面では、しっかり話し合いたいと思った。形式的なセレモニーではなく継承のセレモニーになるように。

2年生の部

星の王子さま

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ　著

建築学科　清水　波音

「星の王子さま」を読んで　――大人と子ども――

小さい頃は何を大切にしていただろうか。育てていた花、おそろいの服、大事にしていた人形など大切なものはたくさんあった。どれも私にとって特別だった。それらは世界に一つのものではないし、とても高価なものではなかった。けれど今はどうだろう。高価なものや人が持っていないものが大切だと思うようになった。王子さまの言う「変な大人」に私もなっていたのだ。けれど、ありふれたものを大切に思えるようになりたい。そのためにどうしたらいいのだろうか。

星の王子さまにとって大切なものは、自分の星に咲いた一輪のバラの花だった。星を出て、五千もの美しいバラを見つけ、やっと自分の星の一輪のバラだけが、特別だということに気づいた。一緒にいる時は、我がままで自信家で文句の多いバラを大切なものとは気づけなかったのだ。「かんじんなことは目で見えない。」というキツネの言葉を王子さまが少しだけ理解したように思えた。

しかし、当事者でなければ、王子さまの大切にしている一輪のバラも美しい庭園の五千ものバラも同じだろう。他人からしたら当然だ。それでも、一輪のバラだけが大切で特別なのだ、と王子さまは言う。私たちも子どもの頃はそう言っていた。他人には理解できない大切なことを、大人になればなるほど言えなくなってしまう。言えなくなっているうちに、忘れてしまうのだ。例えば、王子さまが星を旅して出会った大人もそうだ。実業家、王さま、大物気どりなど、彼らは何億もの星を統治していても、何億もの星を所有していても、その何億もの星の中から特別な一つを見つけることはできないのだろう。何故なら、何億もの星たち一つ一つに自分の時間を費やしていないからだ。そこが、バラ一本を大切にしていた王子との大きな差だろう。

私は、王子さまとバラとはどういう関係なのだろうか、とずっと考えていた。王子さまにとって、バラは初恋の相手で大切なもので、王子さまの初めて出会った友達だ。しかし、王子さまが星を出ていく場面で、王子さまを子どもとするのなら、バラは子どもの心を思い出した大人のように思えた。きっと普段の生活では気づけなかった子どもの心をバラは思い出せたのだろう。

しかし、大人には大人の考えがある。人に認められれば嬉しい。否定されれば悲しい。嬉しいことと悲しいこと、どちらかを選ぶのなら、もちろん嬉しいことに決まっている。「人に感心されることが、なんで、そうおもしろいの？」と王子さまは言います。きっと、子どもには多くの人に否定される怖さを理解できない。大人には子どもの経験があり、子どもには大人の経験がないのだから、あたり前だ。子どもの心も大人の考えも両方を理解していくのは難しいな、と思った。

この物語の最後に、王子さまは故郷に戻るため子どもの体を捨て、帰ってしまう。このとき、王子さまは子どもの心、つまりありふれた物を大切にする心も捨ててしまったのか、と心配したけれど最後の飛行士との約束をしている場面で、それは違うなと思った。王子さまと飛行士は互いに自分の時間を費やし、大切にしてきた。そして、自分の大切なものを言える相手がいる。これは、本当に大切だと思った。

この本を通して、大切なものを持つためには、自分の時間を費やさなければいけない、ということを知った。大切なものを持っていない大人が悪いとは思わないけれども、それを持っている方が楽しいと思うから、これから出会う人や物に、きちんと自分の時間を費やしていきたいと思う。そして、私が大人になった時、子どもたちの「自分だけの大切なもの」を受けいれられるようになりたいと思った。

３年生の部

科学者は戦争で何をしたか

益川　敏英　著

電気情報工学科　空　翔太

今まで人間は数えきれないほど多くの犠牲者を出しながら戦争を繰り返してきた。この戦争で勝利するためには毒ガスや原爆、またさらに強力で残酷な兵器が必要となってくる。

では、どのようにしてこのような新しい兵器が生まれてくるのか。そこで重要となってくるのは科学者という存在である。科学者は実験と考察を繰り返して新しい理論を生みだす。兵器というのはこの科学者が生みだした理論を応用したり他の物とあわせたりして作り出されている。ここで一つの疑問が生じてくる。はたして科学者は自分の研究が兵器の素材になることを光栄に思っているのか。そもそも望んで自分の研究が使われているのか。

この本（科学者は戦争で何をしたか）には疑問の答えとして次のような事が書かれている。

「アメリカが日本へ原子爆弾投下を決定したとき、原爆開発に携わった科学者は『少なくとも自分が進言し、開発に関わった兵器の使い道に発見する権利は残されている』と考え原子爆弾の投下に異を唱えた。しかし政府は彼らの進言など聞く耳を持たず、日本に二発も原子爆弾を投下した。結局、科学者達の意見は何の効力も持たなかった」

つまり、科学者達の研究は本人が全く願っていない形で使用されることがあると言うことです。原爆に関して以外にも例にアルフレッドノーベルについて上げることができます。彼はダイナマイトを開発しそれを土地の開墾や建設現場などで役立たせました。しかし、このダイナマイトの破壊的な力は戦争の中で敵を殺傷させるためにも使われました。その殺傷力の凄さを目の当たりにした当時の人たちはノーベルのことを「死の商人」と呼んでいました。その後、ノーベルは自身の名誉を挽回するため私財を基金としてノーベル賞を作った。

今まで述べてきたように科学者の研究と言うのは少なからず本人の意思とは関係なく使われてしまう事がある。では、そのような事が起きないよう科学者はどう行動すべきか。

「科学者は自分の研究に熱心で余計な事を考えず研究に打ち込んでしまう生き物である。だからこそ、自分の研究が世界に対してどのような影響を持つかを考え研究をしていくことが重要である。」

と、益川氏（この本の著者）は述べている。

私はこの部分がこの本の中で一番心に残りまた考えさせられた。たしかに科学者が行っている研究は当然のようにその研究が社会に対してどのような影響を持つのかそれを研究している科学者本人が一番詳しく知っていることになる。だからこそ、その研究が持つ影響について一番詳しいからこそ、その影響について深く考え社会について説明していく必要がある。またそれと同時に行わなければならない事がある。それは科学者の説明を聴いた上で私たちもその事について考え、悪い方向には使わせないようにする事である。科学者の研究は社会を発展させていくためには必要な物で危険だと言う理由で研究全体を止めさす事はできない。だからこそ科学者だけではなくその研究を必要としている私達も行動して行く事が最も大切になってくると思う。

私は現在、工業系の学校に通っている事もあり将来新しい物を開発してみたいと思う気持ちが少なからずともある。もし、新しい物の開発に携わる事ができたらその開発が社会にあたえる影響と責任を受け止め、そこで危険だからと踏み泊まるのではなく逆に突き進んで行こうと思う。

優　秀　賞

1年生の部

車輪の下
ヘルマン・ヘッセ　著

「車輪の下」を読んで　――孤独を愛した一生――

機械工学科　上本　拓実

この物語は、主人公・ハンスの少年時代とその後を描いた作品である。

ハンスが少年時代の頃は母親がおらず、父親にもあまり愛情を注がれず、放置状態にあった。ハンスは学校で常に首席を取り続ける天性の知性を持っていた。そのため、知識を得られる勉強時間を部屋で過ごしていた。

ハンスは、同年代の子供と外で遊んだりすることよりも、一人で釣りや水浴びをするといったことを好んでいるように感じた。

州試験を受ける頃になると、遊ぶこともなくひたすら勉強を積み重ねていた。しかし、ハンスはそれが最も楽しいと感じており、それによって試験に落ちないという絶対的な自信まで持っていた。単に勉強が好きなのではなく、それによって新たな知識を得ることが快感であるのだろうと考えた。

試験に合格した後、父親に小遣いをもらい、上等なナイフを買い、「随分と時間をかけて」釣竿にする木を選んだ。これは、ハンスが勉強によって失った「美しい」時間を取り返し、何の屈託も不安もない、小さな少年時代に戻ろうとするように自由に過ごしているということが感じ取れた。

ハンスは、家は恋しくないが部屋は恋しいといったように何も考えずに、何の心配もなく過ごせる時間を愛していたのではないかと考えた。しかし、気が収まらず休暇の間も勉強することになってしまい、それを受け入れるところに孤独が故に好きなことを存分にすることができる印象を受けた。

入学後、今まで出会ったこともない自分よりも優れた人物に出会い、新しい世界を知り、冒険のような話が展開されると思いきや、その友達に出会うことによって、ハンスが学校で首席を取るという目標を捨て、勉強もあきらめてしまうという衝撃的な展開になり、予想を大きく裏切られた。

学校生活を通して、ハンスは興味があることにしか力を向けられない性分だが、ついにはその興味さえも失ってしまい、ついには神経症とも診断されて長期休養という形で故郷に帰った。そのまま退学になった。

かつてのような、何の心配もなく、ただ目の前にあるだけの時間を好きなようにして過ごしていた頃に戻ることはなく、ハンスはたくさんのものを失ったように感じた。

ハンスの入学時に寄宿舎に来た時に、部屋の整理が終わった後、まわりの親子が別れを惜しむように言葉を交わしていたので、それらを見た父親が考え抜いた末、ハンスに行ったことが「いい子になれ」ということを言った。このことから、ギイベンラアト親子は、もともとコミュニケーションがないということが伺い知ることができる。

ハンスは、生き方を誰にも教えてもらうこともなく、ほったらかしにされて、それでいて天性の賢さがあったため、自分独りで試験に合格した。生きる、共同生活をするということを全く学習していなかったため、入学後はうまく生活することができなかった。

父親がハンスに対してもっとコミュニケーションをとり、愛情を注いであげれば、ハンスの人生はもっと変わっていたのではないかと考えた。

この作品からは、孤独で生きることの辛さと、人物に対する関わり方や接し方によってその人物の本質に大きく影響されるということを知ることができた。孤独とはどういうものなのかについてよく考えさせられる作品だった。

金閣寺

三島　由紀夫　著

「金閣寺」を読んで　――美と吃りに着目して――

機械工学科　佐藤　尊

この物語は、三島由紀夫による、実際にあった事件をもとに書かれた話である。主人公の少年の視点から書かれており、主人公の吃り（吃音）という生まれつきのコンプレックスや美への歪んだ感性が精緻に書かれている。

この話のもととなった事件とは、一九五〇年七月二日未明に鹿苑寺（通称・金閣寺）で発生した放火事件のことだ。

物語は、少年の生い立ちから始まる。辺鄙な岬の寺の住職のもとに生まれた少年は、生まれつき吃音で引っ込み思案であり周囲の人間からからかわれていた。そんな主人公は、よく父から金閣のことを聞いた。父によると金閣ほど美しいものは地上に無いとのことだった。そのため主人公自身も想像でとても美しいものを想像していた。しかし、実際に初めて見たとき、主人公は金閣を美しいと思わなかった。しかし戦時中だったこともあり空襲で焼けるかもしれないと考えると美しく見えるようになった。

これが話の一部である。これらのことを頭の片隅に残しながら、考えていく。

まず一つ目は「美」についてだ。この「金閣寺」のなかのキーワードの一つである。この物語の中に幾度となく出てくる美とは、金閣のような美であったり、女の美であったりする。しかし、私が不思議に思い理解できなかったのは、女性の美しさを感じようとした時に、目の前に金閣の幻影が出現するというものだ。何故、女性に金閣が重なるのであろうか。このことについては、蜂と菊を例にとりながら書いてあるが金閣の目線になるなど少し考え方に異常なものがあるように感じた。また異常なものは他にもある。旅に出て海を眺め、「金閣を焼かなければならぬ」という想念に包まれる。これは一体どういうことであろうか。自らが美しいと思ったものを自らが壊すとは何を考えているのか。これは常人には到底考えもつかないことだと私は思う。

では何故、このような考えを起こす人間が生まれてしまったのか。

それが二つ目のキーワード「吃り」にあるのではないかと私は考えた。吃りとは、吃音のことだ。主人公は昔から、この吃音がコンプレックスであり、周りからからかわれていた。このことが、主人公の思想を重く、またおかしくしていったのでは無いかと私は考えたわけだ。

また、今の話とは無関係だが著者である三島由紀夫の吃音の使い方には驚かされた。文章中に「私の感情にも吃音があったのだ。」という文がある。そしてその後も、感情が吃るなどと書いてあるのだ。考えにもこの吃音という言葉を使うあたり、著者がいかに優れているかを感じ取れた。

以上の二つのことから、なぜ金閣寺に放火するに至ったかを著者がどのように想像して書いたかを読み取った。この物語に共感は出来ないが著者の言葉の使い方などは、とても勉強になったと思う。そして、私はこの「金閣寺」を中学生の時にも読んでいるが、その時と感じることも変わっていて、読んでいてとても楽しかった。変わっていないのは、この本が名作だと思ったことだけである。またいつかこの話を読んで、今回理解しづらかった所をしっかり理解できるようになりたいと思う。

変身

フランツ・カフカ　著

電気情報工学科　大町　尚秀

「変身」を読んで　――カフカの描いた悪夢と日常――

変身と題されたこの物語は、その題名の通り、主人公であるグレーゴルがある朝目を覚ますと変身してしまっていた、という筋書きである。昨今、起きたら何かに変身していたというのは物語として珍しくはない内容だろう。では一九一五年、つまるところ今から丁度百年前に出版されたこの小説で、主人公は一体何に変身したのかといえば、大きな虫なのだ。

ある日突然自らの身体は巨大な虫になっていた。これほど衝撃的なことはない。しかもこの虫になってしまったグレーゴルは、父母と妹を養う一家の大黒柱だというのだ。実に危機的な状況である。

挙句、変身してしまった朝から仕事の上司が様子を見に来てしまった。結果グレーゴルの変わり果てた姿は家族の知るところとなり、彼は自室に軟禁される形になってしまう。

そんな中でもどうにか生活していく家族だったが、それも限界を迎える。虫の姿となったグレーゴルが父の与えた傷が元となって死んだことをきっかけに、家族は家を引き払い郊外へ出て、物語は終わる。

これだけ聞けば、暗い陰鬱とした雰囲気の漂う小説だと思うだろう。グレーゴルの死の原因が父親であることを鑑みても、重苦しい空気が蔓延しているのは確かだ。だが私は、それは暗澹としたものではないかと考える。

確かにこの変身という小説は苦しみに溢れてはいる。しかし決して退廃的ではなく、絶望に塗れてなどいない。未来への希望もまた存在するのだ。

混沌とした内容。私も読了した直後は一体どんな言葉をあてはめれば良いのか、暫く悩んだ。その悩みは巻末の解説を読んで見事なまでに消え去った。

なんでも、著者であるカフカはこの変身について、恐ろしい夢であるといい、あるときには普通のことが描かれていると述べたらしい。

この文章を読んだとき、私はまさしく稲妻に打たれたかのような閃きを得た。カフカの言った普通のことは、それすなわち日常なのではないかと。

暗く、重苦しい、それでいて僅かな希望が混じった物語。これは日常を描いているのではないか、と私は思った。

自らの身体が得体のしれない虫に変わり、残った家族は苦難に襲われる。なるほど、確かに悪夢が如き出来事である。だが家族はそれでも、なんとか生活しようと奮闘するのだ。貯蓄をつづけ、仕事に就き、家を下宿としてまで生きていこうとする。その合間に、虫となったグレーゴルが問題を起こす。

家族の生きていく姿が日常であり、虫となったグレーゴルの存在が恐ろしい夢。

初めは日常である家族も、悪夢であるグレーゴルをなんとかしようとする。それは妹による世話という形で表されている。しかしそれも、悪夢を忘れることでやり過ごすという方法へと移り変わっていった。本文中で訳された、嫌悪の情を胸に畳みこんで忍ぶ、の通りであろう。家族は日常であろうとし、遂にはグレーゴルの部屋は、誰もがその存在を見ようとしない物置部屋と化したのだ。

空虚な思いを抱いたグレーゴルの死は、至ってあっさりとしていた。彼という悪夢から解放された家族は、案外未来がそう暗雲に包まれているわけではないと気づき、これからの日常に思いを巡らせる。

さきほども申した通り、混沌としている内容だ。なにせ百年も前の作品であるから、今となっては作者であるフランツ・カフカが何を思ってこの作品を執筆したのか定かではない。だが私は日常と恐ろしい夢が混雑した世界を描きたかったのだと、そう思っている。

変身

フランツ・カフカ　著

電気情報工学科　堀越　悠斗

「変身」を読んで　――理解されなかった男が伝えるもの――

この物語は、ある朝目を覚ますと自分が一匹の巨大な虫に変わったグレーゴル・ザムザという男を描いた奇怪な物語だ。外国の文学作品を読んだのはこの作品が初めてで、とても惹かれる作品だった。特に、物語中で三つの点がシナリオの要だと思った。

一つ目は物語序盤で、グレーゴルが巨大な虫に変わってしまう場面だ。外交販売員だったグレーゴルは、自分の姿が変わったことに対し大きく驚いたわけではなく、自分の仕事柄、商売相手から受けるストレスや苦悩からきたものであると考えた。また、今は仕事をすることが優先で、自分の姿もいつか自然に戻るだろうと思っていた。体の自由がきかない虫の姿のままであっても、仕事をするために部屋を出ようと考えたが、かなりの時間を一つ一つの動作に要したために、両親と妹、仕事先の店の支配人を心配させ、グレーゴルが部屋から出るのを心配して待っていた。部屋を出たグレーゴルを見て、支配人は逃げ出し、母親は助けを求め、父親は虫の姿になったグレーゴルを部屋に追い返そうとした。グレーゴルの言葉は理解されず、部屋に監禁された。グレーゴルは部屋から出られなかったが、最低限の食事と掃除だけの世話を妹がしていた。だが、グレーゴルを家の外に追いのけもの扱いをされていた。このとき、虫に変身したグレーゴルを家族はこの虫を出さなかった父親と世話をする妹の行動からすると、少なくとも家族はこの虫をグレーゴルだろうという認識があったんだろうと思った。そして、この変身という現象が当たり前のようにある現象のように感じた。これは、周りの家族たちがグレーゴルが変身したことを不審には思っていなかったからだと思う。

二つ目は、物語の中盤から登場人物の人柄が変化する事だ。グレーゴルの変身をきっかけに、温厚でおっとりとした父親や、兄を慕っていたはずの妹も、グレーゴルに対しての嫌悪の気持ちが生まれた。また、グレーゴルも以前までと全く違う生き方、独立により人間だったときの自分を忘れかけることさえあった。さらに、グレーゴルが家族に対して自分の事を理解してもらおうとは思わず、家族に向かって喋ることもなくなった。グレーゴルは家族の手助けをしようと試みたが、それが全て裏目に出て、かえって家族から嫌われるようになっていき、家族の人々の「巨大な虫が兄である」という確信は薄まっていった。このことから、この作品は「羅生門」のように、人間の心の移り変わりも描いていると思った。グレーゴルが家族に「向ける」思い、家族のグレーゴルに「対する」思いが、変身によって大きく変えられてしまったのだろう。

そして三つ目は、物語の終盤だ。最後まで手助けを試みたグレーゴルだったが、家族は完全に彼を信頼しなくなり、兄としての扱いもされなくなったまま死んでいった。そして彼の死を確認した家族は、グレーゴルの建てた住んでいた家をあとにし、新しい家を捜した。まるで両親や妹が、グレーゴルとの思い出、もしかしたら彼自身のことを忘れ去ってしまおうと考えていたのではないだろうかと思った。そして、両親は娘に新たな夢を託した。

今まで家族のために尽くしていたグレーゴルが、巨大な毒虫に変身してもなお家族に尽くそうとした。しかし、その外見や動きから家族の人々は家族の一員であったのに、彼を見捨てた。外見の違いで否定され、理解を求められないという点が、この作品の大きな柱ではないかと思った。これは現代社会に通ずるもので、人種差別がそれにあたるだろう。人間に限らず、あらゆるものに対して自分たちは平等、対等であるべきだ、とこの「変身」という作品が訴えているのかもしれない。

銀河鉄道の夜

宮沢　賢治　著

建築学科　高田　朋洋

「銀河鉄道の夜」を読んで　――本当のしあわせとは――

この物語は、童話作家や詩人として有名な宮沢賢治の代表作の一つです。僕は幼い頃に宮沢賢治の作品を読みました。しかし、今にしておもえば、当時は作品のことを何ひとつ理解していなかったのかなと感じます。

宮沢賢治の作品を読んでいた頃から約十年。この夏、僕は再びその作品を手にとることになりました。「銀河鉄道の夜」を読んだことはありませんでしたが、意外と内容が濃いので、少し驚きました。また、最近は若手作家の作品しか読んでいなかったので、著名な作家のすごさを改めて思い知りました。そして、今もなおその作品が愛されている理由が少し分かった気がしました。

僕は、宮沢賢治の作品を片手で数えられる程度しか知りません。読んだ作品についてもあまり多くは知らない上に、宮沢賢治本人についてもほとんど知りません。でも、作品に登場する人物と描かれた世界から、そのことに少し触れたように思いました。

主人公のジョバンニは孤独で貧しく、他の同級生の子どもたちよりも厳しい生活を送っています。悩んだり、不満を感じているととることのできる心情描写もありました。これを見て、僕は、過去の自分と重なる部分があると感じました。感情の浮き沈みが激しい子どもだった僕は、ちょっとしたことで落ち込んで悩んだり、腹を立てたりしていました。ジョバンニもまた、感情をもとにして物事を考えているのではないかと思いました。大人であれば、仕方ない、と割り切ってしまいそうですが、悩んでいます。感情をもとにして考えるのは、悩みにつながることが多く、苦しみがちです。でも、ジョバンニのように、人の気持ちを考えることもできるので、考え方としては良いと思っています。

この物語において、ジョバンニが銀河鉄道で出会う人は皆、心がきれいな人だと感じました。また、どの場面でも美しい情景が鮮やかに描かれています。銀河鉄道での旅は、ジョバンニの頭の中で起こっていることです。このことから、これらの描かれた人物や世界はすべて、ジョバンニにとっての理想なのではないか、と考えました。

ジョバンニや、その他の乗客の言葉の端々に、しあわせに対する願いや思いが表れているように思います。灯台守と家庭教師の青年の会話は、冷静でいる印象を受けますが、込められている思いはとても熱いものです。僕が感動したのは、物語の終盤に乗車する姉弟の姉が話をするさそりが思ったこと、そしてジョバンニが思ったことです。「みんなの幸い」のために自らを犠牲にする。自らすすんで実行する気にはとてもなれませんが、これは、おそらく人間にできることの中で最も善い行いなのではないでしょうか。

ジョバンニが思ったことを最初に読んだとき、頭に浮かんだのは、科学者であるアインシュタインの言葉でした。本当に価値あるものは、対象の事物への愛と献身からのみ生まれる、というような言葉です。

安い幸せならいくらでも手に入ります。でも、ほんとうの幸せは、人を大切に思い、自分を犠牲にしてもかまわないという気持ちから生じるものだと思います。

星の王子さま

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ　著

機械工学科　榊　奈々子

「星の王子さま」を読んで　――目に見えない大切なこと――

「ぼくの秘密をいうよ。すごくかんたんなことだ。心で見なければ、よく見えないっていうこと。大切なことって、目には見えない。」王子は砂漠で一匹のきつねと出会い、なつかせた。そして、王子が旅立つ日にきつねはさみしそうに、大切なことを教えるようにささやいた。「きみは忘れてはいけないよ。きみはなつかせた相手に対してはずっと責任があるんだ。」

私はその思いを読んだとき、昔父に犬が欲しいとねだったときのことを思いだした。友達がみんな犬や猫を飼っていたこともあり、私も欲しくなったのだ。しかし父は「動物を飼うということは、その一生を面倒みるということだよ。十年から十五年の短い生涯を後悔させないようにすごさせてあげないといけない。お前にそれができるのか？」と言った。私はそれに答えることができなかった。私には友達もいるし、他にも楽しいことはたくさんある。だが、犬には私しかいないのだ、と思うと私にその責任ははたせそうにないと思ったし、安易な気持ちで飼いたいと言った自分を恥じた。

きつねの存在は王子に、別れの辛さと思い出の大切さを教えた。きつねは王子のおかげですべてのものに王子の面影を見出し、さみしくなくなったし、王子はきつねのおかげで「大切なもの」に気づくことができた。

王子は星に一輪の薔薇を残し旅にでた。薔薇は最後に王子に「愛している」と言い、気丈に送りだした。いつも我儘で高飛車で、王子を困らせていた彼女は泣いていた。王子は最初わからなかった。彼女が泣いた理由も自分にとって彼女がどんな存在だったのかも。

しかし、旅に出てたくさんの薔薇と出会い、きつねと出会い、様々な気持ちを知った王子は、自分も彼女を愛していたのだと知った。自分が毎日水をあげ、虫をとり、風が吹いたらガラスのついたてで囲う。そんな日々が愛しかったのだと気づいた。王子にとって何万本もの薔薇なんて価値がない。しかし、彼女だけは違う。彼女は王子にとって世界でただ一つの薔薇だったのだ。

この部分を読んで、私もまただれかにとって薔薇なのだろうと思った。道行く人にとっては気にもとめない路傍の石のような存在だ。しかし、一部の人にとってのかけがえのない存在なのだろう。

この世にある全てのものはかならず誰かの特別なのだ。しかしそれが目に見えるとはかぎらない。人に空気が見えないように。魚に水が見えないように。大切なものは次第に見えなくなっていく。大切だということさえ気づかなくなっていく。しかしそのままではだめなのだ。目に見えないものに気づかなければならない。本当になくしてしまう前に、自分にとっての薔薇を見つけなくてはならない。

王子は、旅の途中、たくさんの人に出会い、いろんなことを知った。小さな星で生きてきた王子は地球に来て、「僕」という友達ができた。そして王子は「僕」にとっての薔薇になった。王子の長い長い旅が終わり、最後の旅に出るとき、悲しみにくれる「僕」に言う。「おまえが夜に星を見上げるとね、その星のひとつにおれが住んでいるせいで、その星のひとつでおれが笑っているせいで、おまえにとってはまるですべての星が笑っているように見えるはずだよ」そうして王子は体という抜け殻を捨て、空へと帰っていった。

私はこの本を読んで王子に愛を教えてもらった。そして大切なものは目には見えないと知った。この本に出会わなければ、私はそのことに気づかなかったかもしれない。私も王子のように、そして「僕」のように、すべてのものを愛しいと思えるような大切な人を見つけたい。私にとっての薔薇を見つけたい。

星の王子さま

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ　著

電気情報工学科　土岩　大悟

「星の王子さま」を読んで　――特別なあなたへ――

今まで読んだ本の中で一番感動しました。大切にしなければいけないものが周りにたくさんあると思うと、今生きてる事の素晴らしさを感じました。

王子さまが各星々で色んな人と出会い、様々な感情を抱くところを読むと、王子がその星の住民にしている質問が自分にもされているようで不思議な気持ちになりました。大酒飲みの星の人が、呑むのははずかしさを忘れるためだと言っていました。このフレーズを聞いた時、酒とは違う方面で共感を覚えました。自分なら悲しくなったりはずかしくなったりしたらギターを弾くと思います。人によって何をするかは異なると思いますが、私たちは何事にも逃げ道を用意しておくことでひとまずの安堵を得ています。言い方が悪いですがこれは人間が生きてゆくうえで必要な事だと思います。これを上手くやれる人は、上手く自分をコントロールできるという事です。ほんの一コマのシーンですが、高専に通う僕らは社会が見える中で考えさせられるシーンでした。

そして一番の目玉と言っても過言ではないのが、王子とキツネの会話です。キツネは王子に互いになつき、なつかれることで、何億という命の中でたったひとつの特別な存在になることを教えました。そしてそこには大きな喜びと悲しみが伴うことも話しました。それでもキツネは王子に自分をなつかせるように頼みました。王子は悲しみがやってくるのが分かっていたので断りましたが、最終的にキツネの願いに負け、仲良くなりました。人や動物との関わりの少なかった王子にとってその願いは理解できないものだったかもしれません。

この場面を読んで私が強く感じたのは、人はいつでも求められることを望み、また誰かを求めているということです。大切だと思う人が一人、また一人と増える度に、受け入れなければいけない悲しみも増えていきます。それでも僕らは大人になるにつれて自ら望むように大切な人を増やしていくような気がします。高校生の年代の間に履き違えがちだと思うのは、友達と知り合いの区別です。ＳＮＳなどが発達した今、その二つの境界線があやふやになっていると思います。本当に友達と呼べる人はそうはたくさんいないものです。しかし、それに気づけるのは本当の悲しみや苦しみに出会った時であるので皮肉だなとも思います。

これらの考えをふまえて、私が今後の人生に役立てていきたいと思うのは、自分が大切と思われるような人付き合いをすること、また自分が大切な人とは誰なのかをしっかり見極め、いざという時手を差し伸べられるようになることです。人と仲良くなるやり方はたくさんあると思いますが、私はあまりお世辞などが好きではなく、良くも悪くも物事をはっきり言ってしまう性格です。おそらく社会に出るとストレスがたまってしまうのではないかと思います。そんな時に、こんな自分とも仲良くしてくれる、大切だと思ってくれる、手を差し伸べてくれる、そんな友人を一人でも多く作れるようにこれから人と関わっていきたいです。

この本を読んで自分の中で意識が変わったことは、皆同じ人間でも、同じ人間ではないということです。自分にとって特別なあなたでも誰かにとっては何億分の一の人間であり、またその逆でもあります。こうやって生まれくる喜びや悲しみを受け入れ噛みしめながら今後の人生を歩んでいきたいです。

人間失格

太宰　治　著

環境都市工学科　小村　創史

「人間失格」を読んで　――自分とは何か――

「自分」は人として異質な人間だ。他人との相違点に不安を覚え、気がつけば「道化」を選んでいた。

太宰治が「自分」をそう描いているのが、この「人間失格」という作品だ。

私は、道化をしたことがある。いや、他にも経験者はいるんではないだろうか。例えば、子どもが親にお小遣いをもらいたい時、いつも以上にニコニコしながら、何か手伝うことはないかと尋ねる。社員が社長に飲みに誘われたら嫌でも喜びながら、はいと答える。よく目にする光景だ。これらは道化と言えるだろう。

では、葉蔵のした道化は正しかったのだろうか。自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食いちがっているような不安。これから逃れるために葉蔵は道化を選んだ。その結果、家族や友達や先生からも人気を得る存在となった。一見順調な日常だが、これを「恥の多い生涯」と表したのはなぜなのだろう。

「恥」とはいったいなんなのか。後に、酒や女に溺れたことなのか。何度も自ら命を絶とうとしたことなのか。考えてみればたくさん浮かんでくるが、私は、相手に受け入れられたいというエゴイズムで自分を偽ったり、ゴマをすったりすることと考えた。なぜなら、葉蔵が自分を偽ったりゴマをすったりすることに強い罪悪感、無垢な人間性の欠如を感じていたからだ。

しかし、葉蔵のことを知っていた女性は後に、彼を懐かしみながら「神様みたいないい子でしたよ」と語っている。なぜ、こんなに「恥」ばかりの生涯を送った男が「神様」なのか。それは、葉蔵が自分を客観視しているつもりになっていたからだと私は思う。自分を客観した結果、得られるものは主観に過ぎない。しかし葉蔵は、その主観を客観だと思い込み、他人から見た自分とそれとが等しいと考えてしまった。つまり、自分で自分を見た結果得た「主観」が、他人からの自分を見た「客観」とは異なることに気付けなかったのだ。その結果、破滅的な人生を送ることになってしまったが、ありのままに他人の目からみた葉蔵は「神様みたいないい子でしたよ」ということではないだろうか。

そして、葉蔵は最終的に自らに「人間失格」の烙印を押すことになる。果たして、葉蔵は人間失格なのか。そもそも、何を以てして人間失格というのか。

私は、葉蔵は人間失格だとは思わない。一番の理由は、葉蔵のとる行動に私自身も共感できるところが多々あるからだ。はじめに説明したように、「道化」は私だけでなく、多くの人がしていることだろう。誰しもが、周りの機嫌をとり、円滑に物事を進めたいと思っている。たくさんの人が同じように行っている行為なのに、なぜ葉蔵だけが悲劇的な人生を送ることになったのか。それは、偽りの自分を演じ続けることにより、本当の「自分」を見失ったからだと考える。幼い頃から、自分は普通じゃないと思い込み、その不安が大きく膨れ上がって、恐怖さえも感じるようになったのだ。そのため、自分が持つ恐怖、すなわち普通の生活から、むしろ普通ではない生活の方が心地よく感じ、どっぷりとはまっていったのだろう。つまり、「自分」を見失ってしまったかそうでないかが葉蔵と私との違いであるため、していること自体に間違いはないはずだ。よって、葉蔵は人間失格ではないと考える。

「人間失格」へ向かう男の生涯を描いたこの本には、考えたこともない視点から見る人生や、人の頭の中の考えまでとても繊細に表現されていた。私が今までに読んだ本の中で最も考えさせられた作品だった。

海と毒薬

遠藤　周作　著

環境都市工学科　松岡　野乃華

「海と毒薬」を読んで　――自分の意見を持つこと――

読み進めるたびに恐怖が込み上げてくる。この本に対して初めに持った印象だ。戦争末期、九州の大学付属病院で起きた米軍捕虜の生体解剖事件の話である。なんと驚くべきことに一九四五年に実際に起きた出来事なのだ。どうして日本人は生体解剖をする運命になったのか。私は恐ろしさを覚えつつも、この「海と毒薬」という作品に引き込まれていった。

この物語は解剖に参加した勝呂、戸田、そして看護婦の上田の三人の視点で語られる。「西部軍では銃殺と決めていたんだから、何処で殺されようが同じことですな。」これは勝呂を解剖に誘う時の他の医者のひと言だ。本当にそうだろうか。相手がアメリカ人であり敵だからといって命を粗末にしていいわけがない。戦争中はたくさんの命が奪われていくものである。それが命に対する考え方をも変えてしまったのだろうか。

手術当日のこと、米軍捕虜を健康診断とだまして手術台に乗せた。「医者という職業に対する信頼がこの捕虜をすっかり安心させているらしかった。」「そのやわらかな碧い眼や時々うかべる人懐っこい微笑から彼が勝呂たちを毫も疑っていないことがわかる。」作中にはこのようなシーンが描かれている。確かにそうだ。医者は人の命を救うものだ。それはどの国でも同じはずである。命を救うはずの医者や看護婦が生体解剖という名の殺人行為をしていいはずがない。私だったら米軍捕虜の笑顔を見た後に解剖など出来ない。解剖が終わってしまったら、もう元には戻らないのだ。

では、なぜこの解剖が行われなければならなかったのだろうか。作中には今後の医学の発展に必要だからと示されている。解剖に参加した戸田は「だが、あの捕虜のおかげで何千人の結核患者の治療法がわかるとすれば、あれは殺したんやないぜ。生かしたんや。」と言った。そう思うことで罪悪感から逃れようとしたのだろう。どんな形であれ人の命を奪ったということは、心に重くのしかかってくると思う。

断ろうと思えば断れたはずだが、参加者たちがそうしなかった、出来なかったのにもきっと理由があるのだろう。上司からの誘いを断れば自分の出世に関わると考える者。その場に流されてしまう者。様々な考えが交ざり合ってこの結果になったのだと思う。

しかし、私は悪いことだと分かりながらも生体解剖を行ったのは良くないと考える。まず、戦争中という時代背景のせいでもあると思うが命を軽く扱いすぎてはいないだろうか。やはり敵といえど同じ人間だ。それを忘れ、誘われるがまま流されたことでこの事件が起きたのだろう。

次に誘いを断れなかったことにも問題があると思う。生体解剖は悪だという思いはそれぞれの心の中に存在していたはずだ。断れなかったことを後悔する勝呂に戸田が言った言葉がある。「俺もお前もこんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけや。」これは私にとって強く印象に残ったものだ。流されるのは良くないと言ったが、私が彼らと同じ状況におかれたとき、自分の意見も言えずに同じ過ちをしてしまうと思った。彼らに別の時代で生きて欲しかったと強く思う。

生体解剖をするなんてありえない、そんな人がいるのか。そう考えていたが、誰もが迷い込んでしまうものなのかもしれないと思った。この本を読んで、命に対する考えを変えてしまう戦争の恐ろしさ、自分の意見を主張することの大切さが分かった。悪いことは悪いと言える心の強さを持つことで大きな過ちを防げるはずだ。生体解剖の参加者のように誘いに流されたりせず、自分の考えをはっきり言えるような人になりたい。

デミアン

ヘルマン・ヘッセ　著

建築学科　今田　桃世

「デミアン」を読んで　――善と悪について――

なぜそこに困難があったのか。はじめ私は、この物語の主人公シンクレールの気持ちや行動に理解することができないと感じた。善を抑えてまでも悪を選ぶのかと。読んでいて主人公シンクレールと友達のデミアンの会話は私が友達と話す内容とはまるで違い、新鮮で興味深かったが難しく感じた。それとは反対にこのような考え方もあるのかと、自分にはない考えばかりで納得するところもあり、感心した。シンクレールの生活が変わるきっかけとなった少女ベアトリーチェ、デミアンの母でシンクレールが愛したエヴァ夫人の存在もシンクレールに大きな影響を与えたと感じた。

本を探していてかわいい表紙の絵となぜか「デミアン」という文字に目がとまった。そして表紙に描かれているどこか淋しげな少年に興味を持ち、このタイトルを見てなんだろう、面白そうだなと思い読んでみた。読み進めていくうちに引き込まれていき、複雑で不思議な気持ちに何度も襲われた。楽しくてわくわくしてというより、暗くて気持ちが沈むときの方が多かったが、続きが気になってページが進んでいった。

この本のテーマは善と悪についてだと思う。シンクレールが生きていく中で善悪はつきものだと感じた。先生の話を変わった解釈をするデミアンによって迷い「悪」が優位にたったり、不良少年クローマーににらまれまいとして嘘をついたり、善悪に振り回されていると思った。善悪は人間が生きていく中で絶対に判断しなくてはならないものではないだろうか。またこの善悪の判断が人生の大きな壁となり、困難を乗り越えていくことが人間を成長させる種になっているのではないだろうか。

もし私がシンクレールなら夜中にリンゴを盗むことはしないと思う。盗むという行為は絶対にしてはならないことだ。そして、いくら年上の少年が恐ろしいからといってクローマーの指示に従わず、これと逆に怖くて逃げていたと思う。だが、私が小中学生の頃と似ているところもあった。それは悪い道に染まっていったところだ。自分では正しいと思って進んだ道はふと振り返ってみてみると、悪の手に心を奪われたくさんの友達を傷つけた。もしかすると、シンクレールも私と同じような感情になっていたから、このような行動に出たのかとも思った。シンクレールは悪の道を進み染まっていったけれど、ベアトリーチェに出会ったことがきっかけに生活はすっかり変わり、悪い生活を捨て修行し真面目に生きようとする姿は美しく、かっこよく、輝いてみえた。自分にはここまでの心構え、強さはありません。

私はこの本から生きる強さを知ることができた。ちゃんと困難を超えてがんばって生きようと思えた。主人公の友達であるデミアンの考え方自体に憧れた。デミアンはおそろしく話が上手く、とても十歳とは思えない言動をする子だと思った。賢くなくても自分ならできること、自分の良いところを活かして生きていきたい。これからは部活動でも勉強でも生きていく中で、私は自分探しを日々し、自分が不利にたったからといって諦めず、困難にいつでも打ち勝てる心をつくれるように毎日を精一杯生きたい。まずは小さいことから、毎日ひとつだけでもがんばることを決めてそれを達成するために頑張る。大きな壁にぶつかった時が勝負で、ここでどれだけ踏ん張れるかで私の成長は変わると思う。苦しくて辛い時こそ笑顔で壁にぶつかることを喜びに感じられ、「すべての生活は自己自身の道なのだから」おわったあとに悔いのないと言える生き方ができる人間になりたい。困難に出会うことは自分が成長するための大切なきっかけであると信じて生きたい。

一本の手すりから

金沢　善智　著

機械工学科　堀　龍司

この本は簡単に言うと、在宅介護を受けている人の苦悩と、それを解決した用具のエピソードがたくさん詰まったものだった。本を選んだ時、親がホームヘルパーの仕事をしているから通じる所があって勉強になるかな、と軽い気持ちであったが、読んで介護の現状を知り驚いた。介護保険制度は今から十数前と、比較的最近始まったものだし、その費用はもうすでに初年度を倍以上上回っていることに驚いた。高齢化社会になり、さらには少子化も進み、介護の負担が増えるとは聞いていたが他人事だと思っていた節があったがこの問題はちゃんと向き合わなければいけないと思わされた。

今の時点でも介護や福祉の人手が足りておらず孤独死をしてしまう人もいる中、少子高齢化が進んでしまっては介護が追いつかない。本の題『一本の手すりから』が表すように、介護用具の存在がこれからの介護の鍵を握っているのだろう。介護に人の手（ぬくもり）は欠かせないが、それだけでは手に追えないのが現状なのだ。

普段何気無く上り降りする階段も、手足が不自由だったり、目の不自由な人にとっては大きな困難となる。最近はスロープがかなり普及してはいるがまだそういった配慮がなされていない施設もある。まずはそういった、誰しもが使いやすい、ユニバーサルデザインも極力取り込れる必要があるなと思う。

この本の中に、『夢は「車椅子の養蜂家」』というエピソードがある。七十四歳の信一さんは妻と長男夫婦、そして三人の孫に囲まれ、幸せな生活を送っており、仕事の方も農業に加えて養蜂家も営み、朝早くから夜暗くなるまで精力的に働いていた。そんな信一さんは糖尿病と軽い脳卒中を発症していた。だが軽いマヒ程度で大した支障はないからと、仕事を続けていた。そんなある日、お風呂に入っていた時、右足小指先端が黒く変色していることに気付く。

急いで病院で受診すると、糖尿病が原因で起こる「壊疽」という症状で、さらに精密検査を行うと、右膝から下が全てダメになっていることが分かった。このままでは命に関るということで太ももから二十センチほど残し足を切断することとなってしまった。こうして車椅子生活を余儀なくされた信一さんは、早く家に帰り孫たちと暮らしたいその一心でリハビリに励み、二ヵ月で車椅子を自由に乗りこなせるようになり、退院した。だが今までと同じように働くことはもちろんできず、昼間は一人で家に残るしかできない。自力では外に出れず、居間と玄関とトイレを行き来するだけの生活に絶望し、「死にたい」と思うようになってしまった。それを見かねた長男夫婦がケアマネさんに相談すると、自力で外出ができるよう自宅改修を勧められる。具体的には玄関に面した出入り口を広げ、そこにリフトを設置するだけのこと。たったこれだけのことで自力で自由に外出できるようになった。信一さんは「車椅子の養蜂家」となり、日本一おいしい蜂蜜を作ることを目標に仕事を再開させることができた。

このエピソードを読んで、やはり生きていくには何かしら目標や生きがいが必要だな、ないと死にたくなってしまうんだな、と思った。そして何より「死にたい」と絶望していた人に、「リフト」たったひとつで生きる希望を与えられる、そんな福祉用具の力、すばらしさに驚いた。きっと普段健全者は気づかない福祉用具も町中に存在し、陰ながら障碍者の人たちを助けているのではと思った。

そんな福祉用具は人の手と違い、申し訳なさを感じなくてよいところが良い。福祉用具は無償の愛の塊だと思う。そんな福祉用具がこれからもっと進化、普及することを願うばかりだ。

パキスタンでテロに遭いました

野上　あいこ　著

環境都市工学科　浅野　快慧

アメリカで同時多発テロが起こって十四年がたった。当時の私はまだ小さく、その時の記憶は残っていないが、十四年たった今でもニュース等で報じられるのを見ると、本当に大変な出来事だったのだと思う。このニュースを見てテロについて興味を持ちこの本を読んだ。

まず、私のパキスタンに対するイメージは、隣のアフガニスタンも含めてイスラム教の派閥争いが激しく危ない地域、である。著者も実際にテロに遭っているし、こういおったイメージや考えを持っていることは間違っていないと考えていた。しかし、この本を読み危ないというイメージを持ってしまうのは仕方ないが、暴力的な事件を起こしているのはごく一部の人達で、大部分の人は優しい人であるということを知るべきだと考えた。

この本はパキスタンへの旅行計画を立てるところから始まっている。著者のパキスタン行を手伝ってくれた留学生のパキスタン人、ホームステイさせてくれたその家族、テロに遭ったバスに一緒に乗っていた大学生や女性､その後助けてくれた軍人や警察官､村の人々などのたくさんの優しいパキスタン人に著者は助けられている｡「パキスタンの内部で起きているテロの多くは、パキスタン人ではなく、周辺国から入ってきた外国人によるものだということを、私はこのとき初めて知った。テロの恐怖に一番おびえているのは紛れもなくパキスタン人だったのだ。」この文章を読み、なぜこんなことに気付かなかったのだろうと思った。ただ漠然とニュースを見ているとパキスタンは危ないとしか考えない。しかし、視点を変えることでこういったことに気付けた。このことをたくさんの人が知り､､問題の解決に取り組んでいこうとすることが必要である。

視点を変えて物事を考えることは、日常生活でも大切であると考える。例えば〇〇部の人が問題を起こしたとする。ほとんどの人は、これが何回かあれば〇〇部は悪い部だとみてしまうだろう。しかし、問題を起こしているのは一部の人で、大部分の人は真面目に活動している。にもかかわらず先生や保護者、周りの人たちは〇〇部は悪いと見てしまう。一番困っているのは大部分の人である。まず問題を起こさないことが第一ではあるが、周りの人達も本当に困っている人は誰か考え、偏った意見を持たずいろいろな視点から見て評価、考えを持つことが必要であると考える。

この本では、テロの怖さや人の優しさについては深く書かれているが、テロがなぜ、どのようにして起きたかということについてはあまり深く書かれていない。この話のイスラム教のスンニ派とシーア派だけではなく、世界には様々なことが原因で起こるテロや内戦がある。最近ではバンコクで爆発事件があり、これもテロではないかと言われている。私はなぜテロが起こるのかということをもっと考えたり調べたりしてみたい。また、その際には一つの視点ではなく、いくつかの視点から物事を見て考えを持つようにしていきたい。

中国人のルール

水野　真澄　著

電気情報工学科　角中　大志

私たちが生きている中でこの「中国」というワードを聞くと、またなんかあったんじゃないかとか、あまり良い印象は受けないかもしれません。実際のところ、私も中国は好きではありません。でも、これからの長い人生で、明確な理由はあるわけじゃないのにそんな好き嫌いを言うのは違うと思ったので、思い切ってこの本を選びました。

まず、この本を見て思ったのは日本人も中国人も基本的な感情は同じということです。もちろん住むところがかわれば性格や習慣も違いがでてきます。ですが親切に接して嫌がられるなんてことはまずありません。こっちが好きになろうという意思表示を見せれば、自然と良い方に進みます。また、中国人は日本人からしたら言葉が強く、失礼だなと思うことがあるかもしれませんが中国人からしてみればそれが当り前であり悪意はないということをわからなくてはいけないと思いました。

この本の著者水野真澄さんはこの本を出版されたときまでに十六年中国に住んでいます。私の歳とほぼ同じくらい中国で暮らしている水野さんですが、水野さんが高校生だったとき、西洋人から「山手線はどこで乗れるの」と聞かれ、どぎまぎして何もいえなかったそうです。これは私も似たようなことがあります。やっぱり間違った英語を使うのは恥と思うし、なんせ自信がないのでしゃべりたいと思いません。でも、大切なのは言葉ができているかではなく、伝えようとする意志があるかどうかだったというのがよく分かりました。水野さんが私と決定的に違うのは、常に自然体であるということです。私は見栄っ張りなので分からないことを素直に言えないというところがあります。でも水野さんは分からないことは分からないとはっきり意思表示をしています。こういった常に自然体でいることが十六年の中国で生活の支えになっていたんだと思います。また、長い中国での生活から中国人を一括りにしてはいけないということを伝えようとしています。普段私が報道などで聞く中国というのは、抗日デモであったり尖閣諸島問題などの国と国との問題が多いと思います。しかし、その背景をみると、国益の部分を除けば、歴史的な背景からくる感情のしこりであり、それがインターネットなどで増幅され、報道で肯定されます。その報道が国に広がることで、その国の総意だと見なされてしまう。このサイクルで中国は良くない、だから中国人も良くないという考えにたどりついてしまいます。ですが、逆に自分が日本人は好きですかと聞かれたらどうでしょうか。そんなの答えられないはずです。自分の周りにはいろんな人がいると思います。良い人だなとか、ちょっとこの人は合わないなとか、必ずあるはずです。それは中国人に対しても同じなはずです。報道だけに流されない意思を持って、一個人として向き合ってもらいたいです。

よく考えてみると私の生活はかなり中国にお世話になっています。例えば、私はＴシャツなど服を集めるのが好きなのですが、それのほとんどは中国で作られたものでした。こんな風に本当に持ちつ持たれつなんだなと感じました。この日中関係はこの先の人生でも多く目にする問題だと思うし、その度に中国のことを悪く伝える報道も見ることと思います。でも、私は個であり、他の誰でもないんだからちゃんと向き合って、自分らしい答えを出せたらそれが正しいと思いました。

光の教会　安藤忠雄の現場

平松　剛　著

建築学科　白数　夏生

建築家、安藤忠雄の代表作の一つである光の教会。その建設に関わった人々の悪戦苦闘が、安定した筆遣いで描かれているのが本書である。一つの建築物の注文から完成までの、リアルな出来事を文章にした本は意外と少なく、楽しんで読むことができた。だが読み終えてまず湧き上がってきた感情、それは、自分の将来に対する不安であった。

建築を志す者、とりわけ意匠系に進もうとする人間にとって、この本にはなかなか耳が痛いことが列挙されている。建築家が生み出そうとする物は、こんなにも矛盾を孕んでいたのかと、改めて考えさせられる。

現代の日本では、スクラップ・アンド・ビルトが当たり前のように横行している。ホテル・オークラ東京然り、赤プリ然り。そして目先の利益のみを優先させた質の悪い建築が増えていく。その結果日本の風景が破壊されてゆく。建築家はこれをなんとか防ごうと四苦八苦しながら、質の高いものを生み出そうとする。つまり多くの建築家は、社会に対して良い事をしていると考えている。安藤忠雄もその例外ではなく、より質の高い建築を生み出すため、己のこだわりを必ず通し、その結果、多くの名作を生み出してきた。以前まではそんな建築家の態度をカッコイイと思い、それを目標としてきた。しかし、この本を読み終えた後では、そんな建築家のエゴとも言える態度で、簡単に世の中通用するものではないのだなと思うようになった。予算の問題、構造上の問題、施工性の問題、そして何より、そこで働く人たちの心を、どのようにして繋ぎ止めていくかという問題。こういった問題は、大抵建築家のこだわりとは対極を成す。つまり建築家は社会のためと説きながらも、社会を敵に回して働くこととなる。そんな葛藤せざるを得ない環境の中で、果たして僕は自分の信条を貫き通せるのか。はたまた心の弱い自分が、そもそもそんな過酷な職業に就くことができるのか。自分の未来について、あれこれ考えざるを得ない本である。

また、登場人物の強い心からも、己の心の貧弱さと下らなさが浮き彫りにされ、将来が心配になってくる。安藤忠雄は勿論のこと、その部下の水谷孝明の粘り強さ、竜巳建設社長、一柳幸男のおおらかさ、そして那須公明の責任感。こういった人たちがいたからこそ、光の教会は感性に漕ぎ着けたのだと思う。どこをとっても「昭和の男」であり、一言目には「めんどい」、二言目には「だるい」の軟弱な平成生まれの僕にとっては、彼らが眩しくて目を向けられないし、自分の惨状にも目を向けられない。そして恐らく、この性格はもう変えることはできない。こんな事を考えていると、将来の自分どころか、未来に日本は存在できているのかと思ってしまう。だれもが無責任で、保身のみを考え、机上の空論のみのエリートが、日本を支えていけるとはとても思えない。平成生まれの中には、そのことに気が付いている人も少なからず居て、自虐に走っている人もいるのではないか。そんな世代が司る政治が、本当にやっていけるのか、と。

だがしかし、そんなことは分かってはいても、それでも僕は、「昭和の男気」に憧れを抱き続け、彼らを尊敬し、目標とし、それに近づこうと努力し続ける。なぜならばいつかは必ず世代交代の時を迎え、自分たちでやっていかなければならない時が来るからであり、そこから目を逸らすことは、平成生まれにとっても実は、本心ではないからである。

平成２７年度　校内読書感想文コンクール　講評

○平成２７年度選考委員

四・五年及び専攻科選考担当
笠井　聖二（委員長）
横瀬　義雄

三年選考担当　木原　滋哉
二年選考担当　外村　彰
一年選考担当　上芝　令子

読書感想文　総評

自然科学系分野　笠井　聖二

本年度も校内読書感想文コンクールを無事に実施することができました。応募してくれた学生諸君及びご協力頂いた関係の皆さんに感謝いたします。

コンクールとしては１２回目となりますが、実施詳細については毎年改善を試みています。今年度は、より質の高い感想文を期待し、１・２年の指定図書の種類や審査の方法を少し変えてみましたが、効果はどうだったでしょうか。

少数ですが毎年あった４年生以上の応募が０件であったことは、非常に残念です。次回は４年生以上の応募が少しでも増えるように、今から改善を考えていきたいとおもいます。

一年読書感想文　講評

人文社会系分野　上芝　令子

一年生は例年通り芥川賞・直木賞受賞作の他、教員が選定した推薦図書を加え、これらを課題図書として実施しました。今年の読書感想文で目立って多く選ばれていたのは本年度上半期の芥川賞受賞作として大変話題になった『火花』（又吉直樹）で、また、今年ドラマで話題になった『下町ロケット』（池井戸潤）を選んだものも多くみられました。話題作をまず手に取りたくなる気持ちは大いに理解できるのですが、長い夏季休暇中に普段は接する機会の少ない名作と呼ばれる作品にもぜひ触れてほしかったです。そうはいっても、さすが高専生、「ものづくり」「技術者」を扱った作品には大いに触発されたようで、『下町ロケット』を選んだ皆さんの読書感想文はどれも熱く、読み応えがあるものばかりでした。ただ、「ものづくりは素晴らしい」「高専生活を頑張っていこう」という熱意、意欲に溢れたものばかりで、読んでいる方はすがすがしさすら感じたのですが、あと一歩、そこから何を考えたか、という、考察をより深める作業が読書感想文としては欲しかったです。

その点において、今年の優秀作の選考基準には、その作品に対してわかった、わからないはともかく、しっかり自分の頭で考えたものを基準に選びました。単に「読んだ、面白かった」だけではない、「なんなんだ、これは」と自分で考え、なんとか自分でそれを解き明かそうとする奮闘努力がみられるものを優秀作として選びました。一冊の本と真剣に向き合い、その感想を文章として表現するということは実は格闘です。この格闘を嫌がらないでください。自分の言いたいこと、表現したいことをあらゆる言葉と向き合いながらそれらを紡いでいってください。読書感想文が嫌だというのはおそらくこの作業が面倒なのです。自分の言いたいことはなんなのか、それにはどの言葉が最も適切なのか、それらを選び文章として表現する力は必ず皆さんの創造力の基盤になります。ぜひとも一冊の本を通じて自己と対峙し、この格闘に今後もチャレンジしてみてください。

二年読書感想文　講評

人文社会系分野　外村　彰

今年の二年生の皆さんは昨年度同様、私が国語（古典/現代文）を担当しています。読書感想文を夏季休暇の課題にして、後期中間試験の 10 点分に充当する方式も昨年度と一緒です。ただ今年は私の選んだ古今東西の名作リストから任意に選んで、書いてもらいました。後期の授業が始まって一週間目にあたる最終締切り日に、全体の半数ほどが提出してきたところも昨年度と一緒でした（夏休みの宿題とはいえ、かなり推敲に時間をかけていた模様です…。）

学生の選んだ小説で、目立って多かったのはドラマや映画にもなった「博士の愛した数式」「アルジャーノンに花束を」で、それぞれに読み応えがありました。ちなみに昨秋の文化行事（演劇）において「罪と罰」を鑑賞したので、リストにドストエフスキーの４大長編を加えたのですが、選んできてくれた人が若干名だったのは少々肩すかし？　でした。

まず各クラスの優秀作は私が選定しました。なまじ学生さんたちの顔をよく見知っているため、情が移りやすかったというのか、つい甘めに評価するきらいもあったと思います。最優秀作は昨年度までの学生による投票ではなく、担当教員の一存で選ぶことにしました（これまでの投票では若い記号を打った原稿が、とかく選ばれる傾向にあったので…。）

結果的に、これは偶然なのですが、「星の王子さま」をとりあげた文章を、最優秀を含めて３点選ぶに到りました。この名作は、人間の心の持ちようについて深い、さまざまな省察をすることが可能です。「星の王子さま」に限らず、ある作品に対して、深い共感をもって自己の内面を見つめなおし、人として成長したことを伝えてくれる感想文が選ばれたわけなのでした。

三年読書感想文　講評

人文社会系分野　木原　滋哉

3 年生の課題は、ノンフィクションや評論を自分で選んだうえで、読書感想文を書く、というものでした。私たちが自分で経験できることは限られています。しかし、ノンフィクションや評論を読むことで、自分の経験を超えて、自分自身を現代社会の問題の渦中に置くことになります。

自分が同じことを経験したら、どうするだろうか、どう感じるだろうか。そこから、今の自分の生活を見直そうと決意するに至った人もいます。異文化衝突が伝えられる中で、私たちが陥りやすい偏見を回避する方法を学んだ人もいます。高専生が学んでいる科学・技術のあり方について、改めて思考をめぐらした人もいます。

いずれにしても、読書感想文に取り組むことによって、現代社会が抱える問題について、真摯に考える機会になったと思います。ただし、選んだ本によって、何を学ぶことができるのかが左右されます。これからも、多くのノンフィクションや評論を読むことで、自分の経験を超えた経験を重ねる快楽に身をゆだねてほしいと願ってやみません。

行事報告　平成２７年度ブックハンティング

学生会　文化環境委員長

渡邊優樹

ブックハンティングとは学生が自分達で読みたい本、必要な本を選んでもらう行事で、年に２回行われます。その第１回目のブックハンティングが５月２８日(木)に開催されました。場所はジュンク堂書店広島駅前店でした。とても広くゆったりとした中で本を選ぶことができました。今回は４年・５年・専攻科の人たちに参加して頂きました。ありがとうございました。上級生になると今回が初めてではない人も多くスムーズに本を選ぶことができました。
本がたくさん置いてあるので専門書の数も多く、自分のためになる本、また図書館に置いてあればみんなのためになるだろうと専門書を選ぶ人が多かったです。
またじっくりと選ぶ時間があったため、選びたい本がたくさんでてくるので、予算の中でおさめるのが大変でした。
次回は１年・２年・３年生の参加になります。テスト後に行われるので疲れがたまっている中の参加になりますが、普段買えない本やいろんな本を見るいい機会になるので是非参加をお願いします。
また今回、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援して頂いています。ありがとうございました。

ブックハンティング図書紹介

ー第１回５月２８日ー

わたし、解体はじめました

Y.W

平凡な女の子が、新米猟師になるまでの過程が綴られた一冊です。きっとこれを読めば大切なメッセージを受け取る事が出来るはずです。

ダム湖の中で起こること

S.U

この本は、ダムとは何か？ダムの上流と下流ではどんなことが起こっているか？これからダムをどうしていくか？などダムの様々な疑問を実際にダムの研究をした著者が現場で調査したデータをもとに解説していきます。私は卒研が河川系の研究なのでこれを読んで理解を深めたいと考えています。

かわいいパン

T.A

パンの写真と、そのパンの特徴が書かれています。実は一つ一つのパンに名前が付けられてて、タメにもなります！例えば、ハンバーガーを挟んでるアレ。聞いたことあるかもしれないですが、「バン」と言います。二つで挟んでるので「バンズ」ですね！ぜひ、見てみてください！！

Fifty Shades of Grey

O.D

小説として「マミー・ポルノ」と呼ばれアメリカでベストセラーとなった洋書であったのと、少しロマンス的だが、内容として非常にいい本であるから選びました。英語版だから、読んだら英語力も上がると思う。

進撃の英語

N.M

この本は「進撃の巨人」のストーリーを英語で読むというものです。ただ英語でストーリーがかいてあるのではなく、日本語訳もあり、漫画となっているので、英語が苦手な人でも楽しく読むことができる一冊です。

究極軸

T.S

自分はとてもダンスが好きで、尊敬しているダンサーの一人である。黄帝心仙人さんのダンスへの考え方などが詳しく書かれているためこの本を選びました。ダンスに興味のある方は是非読んでみてください。

建築証明の作法

C.S

この本は日本を代表する照明デザイナーの面出薫さんによって、照明デザインの仕事とは何たるかが、作品の中で実践してきた事例をもとに書かれた事例をもとに書かれた建築に携わる人や建築証明を志す人に向けた本です。

夢を叶えるゾウ３

M.T

成功する人の習慣を関西弁の神様ガネーシャが物語形式で伝える本です。とても読みやすく、また自分でもこれならはじめられそう、というものが多いため、とても面白い本です。今回はこのシリーズの中絵もブラックガネーシャが登場するちょっとスパイシーな展開になっています。

悟浄出立

Y.M

いてもいなくてもいいんじゃない？そんな扱いを受けてしまう「脇役」たちにスポットを当てた作品です。きっと「脇役」たちがだいすきになるはずです！

エネルギー問題入門

S.M

この本では、シェール革命、地球温暖化、原子力などのエネルギー問題の全体像を、名門バークレー校の人気ナンバーワン教授が分かりやすく解説しています。エネルギー問題の現状について、知ることが出来るので、おススメです！

神社に秘められた日本史の謎

S.M

考古学や文献学の知見も取り込んだ「伝承分析学」としての日本の民俗学の立ち位置から、日本の歴史の中で神社がどのように変遷してきたのかということを分かりやすく紐解いた本です。ん本分かと強く結び付く神社について興味がある方は、是非読んでみてください。

寄生虫なき病

H.S

「ヒトはたくさんの生物に寄生されている」と言うと、なんとなく気持ち悪い感じがする。しかし、だからといってその全てを排除してもよいのだろうか？ヒトと寄生虫の関係に興味があり、購入した。

蘇る変態

K.M

ミュージシャン、俳優など現在マルチに活躍している星野源さんのエッセイ本です。２０１２年に彼を襲ったくも膜下出血と闘う彼の生活と彼の原動力となっている「変態」さを感じることのできる一冊となっています。

暴露：スノーデンが私に託したファイル

N.K

「NSA（国家安全保障局）が全世界の個人情報を監視、収集していた」普段何気なく使っているインターネット。SNS 等の普及により情報の発信が容易になった今だからこそ、そのリスクについて改めて考えてほしい。

苦しんで覚えるＣ言語

H.H

学校でも良く使う、C 言語ですが正直先生のプロジェクタを与すだけで何をしているかわからない。しかもテキストもわかりにくいですよね。この本は、私が読んだどの本よりもわかりやすくＣ言語について書かれていました。タイトルは怖いですが内容は最高の一冊です！！

必携　草字林

D.N

中国の趣ある華麗で優美な草書。その総書がなんと 12000 字もこの字典の中に示されています。さぁみんなもこの字典を読んで草書マスターになろう。

ー第２回１１月３０日―

学生会　文化環境副委員長

三京　拓弥

今年度の第２回目のブックハンティングが、１１月３０日（月）に開催されました。場所はジュンク堂書店（広島駅前店）に１～３年生の学生およそ２０人ほどでおじゃまさせてもらいました。試験明けの当日ということもあり、みんな解放感に満ち生き生きと本を選んでいる様子が見受けられました。予算は１人１万円でしたが専門書には高価なものが多く、どの本を買うか選ぶのにとても苦戦しました。中には自分の持ってきたお金で気になった専門書を選んで買っているようなとても意識の高い学生も居て素晴らしいなと思いました。
なかなか普段買えない本を選んで買ってきたので学校の図書館に並べられるのを楽しみに待っていてください。
なお、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援していただいてます。
ありがとうございました。

人魚の眠る家

S.K

この本は東野圭吾さんの最新作です。
娘の小学校受験が終わったら離婚すると約束した仮面夫婦の二人。彼らに悲報が届いたのは受験の直前。娘がプールで溺れた―。
そこから始まるミステリーです。

面白くて眠れなくなる数学者たち

S.I

数学史や数学者の話に興味があってこれなら難しくなく読みやすそうだと思って選んだ。

百万分の一回のねこ

H.N

誰しもが目にしたことがある佐野洋子作、「百万回生きたねこ」。かの名作に人気作家たちが捧げた短編集です。子供ながらに抱かされた、永遠の生への不思議な感情を、もう一度新たな観点で見つめなおしましょう。

戦艦大和　最後の乗組員の遺言

T.K

なぜこの本を選んだかというと戦争に興味があったからです。上官の「お前は生きろ！」という言葉に感動し実際の乗組員だった人の話を是非読んでいただきたいと思いこの本を選びました。

すべての犬は天国へ行く

Y.I

アメリカの西部劇の話で、劇や舞台でオリジナル版やリメイク版が出ていて、本当の話はどんな話か気になって選びました。

機械工作用論

K.K

鋳造・溶接・切削加工から NC 加工・手仕上げと組立て・精密測定まで広範な機械工作の全分野をやさしく解説している。
実習で行った作業や測定の仕方を忘れてしまったとき調べることができて便利なので選んだ。

カイコの紡ぐ嘘〈上〉〈下〉

S.N

ロバート・ガルブレイス著、池田真紀子訳の、海外ミステリー小説です。なぜえらんだかというと、海外ミステリーを読みたいと思ったからです。
〈上〉〈下〉あるので長く楽しめると思います。

もう一度学ぶ日本語

A.K

表紙の女の子に目をひかれました。中を見てみると、聞いた事はあっても意味をよく知らない。という日本語が分かりやすく説明されていました。この本で日本語の「新たな発見」をしてもらえたら。と思いました。

マスターしておきたい技術英語の基本
決定版　改訂版

H.H

普段話している英語と論文で使われる英語は実は違います。英語で論文を書く機会があると思いこの本を選びました。簡潔にわかりやすい英文とはどうやってできるのか、小説、会話英語と論文ではどんな違いがあるのか、といったことをこの本は教えてくれます。

電子工作入門以前

T.Y

もっといろいろな人に電子工作の面白さを知って欲しいので電子工作を始めるための基礎について書かれているこの本を選びました。

１００円のコーラを１０００円で売る方法

S.A

いかに自分の製品を売るか？それが「良いもの」だったとしても売れる保証はない。しかし付加価値を付けるとどうなるだろう。損経済のカラクリに興味を持ち選んだ。

これが物理だ！

T.S

物理に対する考えが変わるかもしれないと思ったので選びました！

小屋から家へ

K.Y

様々な家を建築している中村好文さんに興味があり、この本を選びました。少し前に中村好文さんについてのビデオを授業で見たとき、こんな建築家になりたいなぁと思っていました。
この本には中村好文さんの建築してきた家の写真が見れるのでとてもおすすめです。

炭素繊維の本

R.O

最近ボーイング７８７B などたくさんの機会につかわれ、また、日本がリードしているといわれる炭素繊維に興味がわき、その入門としてこの本を選びました。

感情８号線

M.I

このお話は５人の２０代くらいの女性たちの話で環状線八号線沿いの街に暮らす女性たちの揺れる恋心と日常を描いた傑作と書かれています。表紙のもきれいな会社員風の女の人の絵でおしゃれでいいなと思いました。

[名画]と読む危険な美女

A.Y

この本は、絵画や彫刻に描かれている美女たちの魅力を読み解いています。私は表紙と題名に惹かれてこの本を選びました。写真のあとに説明があるので読みやすいと思います。

広島は原爆から
どのようにして復興したのか

T.M

広島に住んでいる人として、広島に落とされた原爆のこと、そしてそこからどのようにして復興したのか建築物は瓦礫の山からどのようにして建っていったのか知るべきだと思うので、おすすめです。

最高の工事写真の撮り方　増補改訂版

R.H

建築・環境は、必ず必要になってくる
工事写真。写真や図で分かりやすくカメラの基本操作や悪条件の現場での撮影まで
幅広く解説されています。ただ眺めているだけでもおもしろく、かつためになる本です。ぜひ読んでみてください。

Excel で学ぶ水理学

Y.W

この本は水理学を学んでいる人、水理学を学ぼうとしている人に読んでもらいたいです。わからなかったことや実験のレポート作成等に役に立つと思います。

片付けの解剖図鑑

D.M

家を設計する上で、収納というのはとても重要です。どこに何を仕舞えばより動線を短縮できるか、より広い部屋をとることができるかなどその家の快適性に大きく関わってきます。

そんな建物の大きな要素である「収納」について詳しく知りたいと思い、この本を選んでみました。

宇宙物理学

G.S

米の「火星移住計画」、日本の「はやぶさの小惑星探査」など、今世界は宇宙に積極的に挑戦しており、宇宙物理学に精通する人材が重宝される時代である。

この本は、宇宙空間における物理現象及び原理を高校数学とイメージしやすいイラストで分かりやすく説明されており、宇宙物理学を学ぶのによき１冊となっている。

【表紙】暗車は並ぶ

この写真は、大和ミュージアムにいったときに、スクリュー４つがシンメトリーになるような構図が面白いと思い撮影しました。

（撮影：呉高専建築学科　１年　荒谷　太一）

お知らせ

貸出回数上位ベスト10

（調査対象期間：平成27年4月1日～平成27年9月30日）

	順位	題　　名	著　　者	回数
※	1	Vol. 6：TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	19
	2	Vol. 4：TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	15
	3	編入数学徹底研究：大学編入試験対策	桜井基晴	14
	4	くずし字用例辞典　普及版：1版	児玉幸多	11
	5	Vol. 1：TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	10
	5	Vol. 5：TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	10
	5	TOEIC Bridge公式ガイド&問題集	The Chauncey Group International	10
	5	くずし字用例辞典 普及版	児玉幸多	10
	9	1；のだめカンタービレ：バイリンガル版	二ノ宮知子	9
	10	1；ちはやふる：バイリンガル版 = Chihayafuru	末次由紀	8

DVD利用回数ランキング

（調査対象期間：平成27年4月1日～平成27年9月30日）

	順位	題　　名	No	回数
※	1	スターウォーズ　1	106	3
※	1	ピタゴラ装置	563	3
	3	いま、会いにゆきます	251	2
	3	アリス　イン　ワンダーランド	517	2
	3	岸辺のふたり	537	2
	3	バッテリー	379	2
	7	アナと雪の女王	630	1
	7	ナイトミュージアム（1＆2パック）	518	1
	7	世界の中心で愛をさけぶ	210	1
	7	スターウォーズ　2	107	1

編集後記

　今年も、読書感想文，ブックハンティング，ビブリオバトルといろんな本を教えてもらいました。このほか、図書館には昔話題の本がたくさんあります。時には、書架の間を探索してみてください。